

# 主観主義をめぐるバーナード・ウィリアムズの 議論について（その1）

田 中 一 馬

日常生活において、道徳的な意味での善悪や正邪の如何が問われる事態に遭遇することがある。その際、事の善悪正邪について自ら考えをめぐらすこともある。そういった場合私たちはおそらく、一人ひとりが考えをめぐらし、ときには互いに議論を展開することにより、事の善悪正邪に関する一定の結論に理にかなった仕方でおおよそ一致して到達することを期待しているのではないだろうか。事の善悪正邪について考えをめぐらしたり議論したりといった営みに意義があるのだとすれば、上のような意味での客観的な正しさを備えた結論が存在することは認めなければならない（たとえ実際にそうした結論に到達するのは困難であるとしても、少なくともその存在の可能性が否定されてはならない）……このように考える人は少なくないだろう。また逆に、道徳的な意味での善悪正邪に関して客観的な正しさを備えた見解は存在せず、存在するのはただ各人の主観的な意見だけであるとすれば、事の善悪正邪について考えをめぐらしたり議論したりするのは虚しいと思えるかもしれないし、それ以前に、そもそも事の道徳的な意味での「善悪正邪」ということでいったい何が言われているのかわからなくなるかもしれない。ところが、まさにこの「道徳に客観的な正しさは存在しない」という主張が、これまで道徳哲学の領域で提起されてきた。そしてそうした「主観主義」に対しては、道徳における客観的な正しさを確保しようとする論者たちから批判が寄せられてきたのである。

バーナード・ウィリアムズは、その最初の著書『道徳：倫理学への手引き』（*Morality: An Introduction to Ethics*, 1972. 以下『道徳』と略記）においてこの主観主義をとりあげ、立ち入った検討をおこなっている。本稿では、『道徳』においてウィリアムズが主観主義をどのように吟味しているかをたどることにする。

## 1 主観主義とは何か

『道徳』においてウィリアムズはまず、主観主義を「道徳的な意見もしくは道徳的な判断もしくは道徳的な見方が「単に主観的であるに過ぎない」という見解」(14)であるとした上で、そうした見解を表現したものとして次の三つの言明が挙げられると語る。

- (a)ある人間の道徳的な判断は、単にその人間自身の態度を述べる state (あるいは表出する express) に過ぎない。
- (b)道徳的な判断は、科学的な言明にとって可能であるのと同じように証明したり立証したり真であることを示したりすることができない。
- (c)道徳的な事実なるものは存在しない。存在するのはただ、科学や通常の観察によって発見可能な事実およびそうした事実の上に人々が据える価値のみである。(14)

言明(a)は、広い意味で「論理に関する logical」あるいは「言語に関する linguistic」見解の表明、すなわち道徳的な発言(音声や文字で形作られる)がいったいどのようなものであり、それが何をしているものなのかに関して何らかのアイデアを述べる言明であるとされる(14)。論理あるいは言語に関する言明(a)が道徳的な発言を「主観的である」と主張する場合、その言明は、道徳的な発言が有する何らかの特徴の内に「主観的である」あるいは「客観的でない」と呼ぶような側面が存する、と主張しているわけである。

言明(a)では、人間の道徳的な判断が「単にその人間自身の態度を述べる(あるいは表出する)に過ぎない」とされている。判断を下す者自身の態度を「述べる」あるいは「表出する」という二つの可能性を挙げている点からすると、ここでウィリアムズがたとえばA.J. エアによる主観主義理論の二種類の区別を念頭に置いている、と考えるのが適切であろう。エアはその主著の一つである『言語・真理・論理』(初版1936年、第二版1946年)において、倫理に関する自らの理論を「徹底的に主観主義的である radically subjectivist」としつつも、それは「正統の主観主義理論 the orthodox subjectivist theory」とは異なっていると述べる(Ayer 109)。「正統の主観主義理論」は、「ある行動を正しいと呼びあるものをよいと呼ぶことはそれが一般的によしとされているということだ」と

主張するヴァージョンと、「ある行動が正しい」とか「あるものがよい」とか確言する人は彼自身がそれをよしとしているといっているのだ」と主張するヴァージョンの二つに大別されるものの、その両方が「倫理的な価値についての陳述が経験的な事実についての陳述へ翻訳できる」とする点で共通している。しかもその場合の「経験的な事実」とは、ある人もしくは一群の人々が行為や目的に対して抱く「是認の感情」のことであるとされる<sup>(1)</sup>。つまり「正統の主観主義理論」とは、何らかの物事が「正しい」とか「よい」とされる場合、「正しい」や「よい」という語の定義からしてその判断は、「その物事が一般的もしくは個人的に承認されている」という経験的な事実を述べるものである、と考える立場のことである。これに対してエア自身は、「人が倫理的な判断をするとふつう言われるであろうようなあらゆる場合において、それに関連する倫理上の語がなう機能は純粹に「情緒的」である」のであって、道徳的な判断は判断する者の心情を道徳的に表出するに過ぎない、と考える(Ayer 109、今日においてエアのこの立場は「情緒主義 emotivism」と呼ばれる)。「述べる」と「表出する」の二つの可能性を挙げている言明(a)の表記は、たとえばエアがおこなっているこのような「正統の主観主義理論」と「情緒主義」の区別を念頭に置いたものであろう(そのことは、『道徳』の後の記述を見てもうかがわれる)。

ちなみに、「正統の主観主義理論」と「情緒主義」の両者が道徳的な判断を「主観的である」と見なす理由には、共通した部分があると考えられる。何らかの物事が「正しい」とか「よい」とされる場合、「正統の主観主義理論」からすれば、その判断は(それがさしあたり一人の人の判断であろうと、あるいはまた複数の人の判断であろうと)、何者かがその物事を自ら承認しているという人間の心理に関する事実を述べるものに他ならない。また「情緒主義」からすれば、その判断は判断者の心情の表出であるとされる。つまり両者は共に、道徳的な判断が、その対象である物事のありようとの関わりでなく、判断者の心的な態度との関わりで成り立つものである、と考える点で等しい。まさにこの点で両者は「主観的である」とされる余地があるのだ。

次に、言明(b)は、「知識という概念と関連している一組の考えを導入する」「道徳的な判断に関する認識論的な epistemological」見解の表明であるとされる(14)。ある判断を「証明したり立証したり真であることを示したりする」こ

とは、とりもなおさず、その判断内容を「知識」と見なすことと直結しているからだ。

言明(b)は、「科学的な言明にとって可能であるのと同じように」証明したり立証したり真であることを示したりすることができない点をもって、道徳的な判断が「主観的である」と主張している。道徳的な判断に認識論的な客観性が認められるか(主観性しか認められないか)否かは、道徳的な判断が科学的な言明におけるのと同様な仕方では正当化可能であるか否かによる、というわけだ。

道徳的な判断が科学的な言明におけるのと同様な仕方での正当化を受けつけないというアイデアは、エアの理論の内にも見出される。『言語・真理・論理』初版への序文においてエアは、自らの見解がラッセルやウィトゲンシュタイン、ひいてはバークリーやヒュームが唱えた経験論に由来するものであると位置づけた上で、ヒュームに倣い、真正の命題を「諸観念の関係 relations of ideas」に関するものと「事実の事柄 matters of fact」に関するものの二種類に分ける(Ayer 31)。前者には論理や純粋数学の命題が属するのだが、それらは「経験的な世界についていかなる断言をもなさず、ただ何らかの仕方では記号を用いようとする私たちの決定 determination を記録するだけのものである」が故に「経験において反駁され得ない」。つまり、「諸観念の関係」に関する命題は分析的であり、したがってその真偽は必然的かつ確実であることになる(ibid.)。片や後者は蓋然的であって確実であるとは言えず、どこまでも経験的な仮説であるに留まる。そして、ある言明が真正の経験的な仮説を表しているか否かは、「何らかの可能な感覚—経験がその真偽の決定にかかわることを求めるのみである」ような種類の検証原理に基づくとされる(ibid.)。言い換えると、「事実の事柄」に関する命題は感覚的な経験による検証によってのみ真偽の蓋然的な確定が可能であるような、総合的な命題である。

このような相違があるものの、上記二種類の命題は、真もしくは偽でありうるという点で真正の命題である。これに対しエアは、上記二種類の命題のいずれでもない「命題」は真でも偽でもなく、無意味であると考え(『言語・真理・論理』第二版において、この種の「命題」は情緒的には意味を持つ significant ものの文字通りには意味を持たない「偽の命題 pseudo-proposition」であるとされる<sup>(2)</sup>)。そしてエアは、道徳的な判断は判断者の感情を表出するものとしてまさに真でも偽でもなく、したがって検証不可能と見なすのである<sup>(3)</sup>。

経験の全領域は科学により原理的に探究可能であると考える<sup>(4)</sup>エアの立場にとって、「事実の事柄」に関する命題が上述の原理に基づき検証可能であるのは、科学という営みの成立に不可欠な要素である。これに対し、道徳的な判断は科学という営みを支える「原理に基づく検証可能性」を備えていない。認識論的に言えば、この点で道徳的な判断は科学的な命題（あるいはそれを表す言明）と比較して主観的であるとされることになろう。

残る言明(c)は、「道徳的な事実」の存在を否定するものである。ここで道徳的な事実は、「科学や通常の観察によって発見することが不可能なもの」の一種であり、発見可能な「客観的な」事実と区別される「主観的なもの」であるとされている。「そうした事実の上に人々が据える価値」の存在を(c)は否定しないのだけれど、ただしそのような価値は「(客観的な)道徳的事実」の名に値するものではないというわけだ。

ウィリアムズは、このような言明(c)が「形而上学的な metaphysical」見解を表明している、と称する。たしかに、「世界の内に、何が存在していると言えるか」という形而上学の問いに対し、世界にはまずもって科学や通常の観察によって発見可能な事実のみが存在し、「それ以外のものはみな、人間がこしらえたものだ」(15)、と言明(c)が答えていると見ることはできるだろう。

言明(c)が表明しているとされるこうした形而上学的な主観性を、エア自身の立場である「情緒主義」の内に看取することは難しいように思われる。道徳的な事実もその一種であるような「科学や通常の観察によって発見可能な事実とは、区別されるもの」はもちろん感覚的な経験の対象ではなく、ゆえにそうした経験による検証を受けつけない類のものである。したがって検証原理に立脚するエアの立場からすれば、道徳的な事実についての命題は真でも偽でもなく、そのようなものについて有意義な仕方では語ることができないことになるわけだ。

道徳的な事実の存在を否定するように思われるのは、むしろ、エアが自らの「情緒主義」と対置する「正統の主観主義理論」の方であるかもしれない。前者と異なり後者は、道徳的な判断が「何らかの物事が一般的もしくは個人的に承認されている」という経験的な事実を述べるのものであると主張していた。片や言明(c)が言及している「道徳的な事実」なるものは経験的な事実とは別種のものである。したがって、道徳的な判断が何らかの事実について述べるという

機能を有すると前提する限り、そうした事実であるとして「正統の主観主義理論」が認める類の経験的な事実以外に、道徳的な判断がそれについて述べると想定可能な別種の事実(すなわちここでは道徳的な事実)が存在してもらっては、「正統の主観主義理論」にとって都合が悪いであろう。当該理論には、少なくとも、ここでいう道徳的な事実の存在を否定する合理的な動機が存在するのである。

さてウィリアムズは、主観主義の見解を表明している上記三つの言明の内には「事実と価値の区別」という要素が共通に潜んでおり、とりわけ形而上学的な見解を表明している言明(c)においてこの要素がもっとも顕在化している、と語る(15)。世界の内に存在していると言えるのはただ科学や通常の観察において発見可能な「事実」のみであり、道徳的な「価値」はそうした「事実」の上に別に据えられたものであって「事実」そのものとは明確に区別される、と主張する言明(c)の内には、「事実と価値の区別」という要素が含まれていることは明らかである(この点については、すぐ前で、「正統の主観主義理論」やヒュームの道徳理論と関連させながら述べた)。また言明(a)や(b)に関しても、それらとエアが語る二種類の主観主義理論との対応関係を前提するならば、それらの内に「事実と価値の区別」という要素が潜んでいることが認められると思われる。なぜなら、まず言明(a)が「正統の主観主義理論」と結びつく場合には直前で言明(c)に関して述べたことが当てはまる。他方、言明(a)および(b)が「情緒主義」と結びつく場合には、たしかに「正統の主観主義理論」の場合に成り立ったことがそのまま成り立つとは限らないように見える。それは、「情緒主義」が道徳的な事実の存在・非存在について断定を差し控える立場であったからだ。しかしそれでも「情緒主義」は、「正統の主観主義理論」と同様、道徳的な判断がその対象である物事のありようとの関わりでなく判断者の心的な態度との関わりで成り立つものである、と考える立場であった。そして「情緒主義」において、「その対象である物事のありようとの関わりで」成り立つ判断とは、「事実の事柄」に関する命題に他ならないと言える。「事実の事柄」に関する検証可能な命題と「価値」に関する検証不可能な道徳的な命題とを峻別する「情緒主義」もまた、やはり「事実と価値の区別」と呼んでよい類の区別をおこなっているのである(ただし、それはさしあたり言語的および認識論的な領域内においてではあるのだけれど)。

## 2 「主観主義の信管を取り外す」企て

科学や通常の観察によって発見可能で、それに関して構成される判断は科学的な言明に対するのと同様の仕方では正当化することができる、そのような「事実」の領域と、「事実」とは別にその上に人間が据え、それに関して構成される判断は科学的な言明に対するのと同様な仕方では正当化されないような、そのような「価値」の領域とを区別し、道徳的な判断を後者の領域に固有のものと見なす立場が、『道徳』でウィリアムズが取り上げる主観主義である。

ところが、近代以降の欧米の道徳哲学者の中には、もし「事実」と「価値」の間にこのような区別があるのだとすれば、そこから多くの人々には受け入れがたく見える帰結が導かれるように思われる、と考える者たちが少なくなかった。そしてその中で主観主義を擁護する者たちの多くは、「主観主義を受け入れるなら、受け入れがたい帰結をも受け入れざるを得なくなるのではないか」という不安を払拭するために、主観主義が本当はそのような危険性を含んでいないということを示すこと、すなわち「主観主義の信管を取り外す defusing subjectivism」ことを企ててきた…このようにウィリアムズは語る(15)。

彼によればこの企ては、主観主義の受け入れにとって問題となるように一見思われる帰結(なるもの)が実はそもそも主観主義から導かれる帰結ではないということを示すか、それともそれはたしかに主観主義から導かれはするものの実は不安がるに及ばない類の帰結であるということを示すか、このいずれかであるという。そして、前に掲げた言明(a)～(c)との関連では、この企ては次のようなものであると表すことができるという。

それら〔田中註：言明(a)～(c)のこと〕は、擁護可能である限り、同一の事柄へと至る。そして、その事柄は恐るべきものでないし、道徳の本性にとって本質的なものでさえあるのだ。(15)

『道徳』第2章から第4章でウィリアムズは、この「主観主義の信管を取り外す」企ての全体像を描いている。企てにおいては、まず主観主義擁護論と反対論が言明(a)をめぐる相手の主張を交互に批判し合う一連の議論が展開され、その末に、主観主義擁護論の側が自らの立場を表現するものとして言明(b)に近似する主張を提示するに至る(この部分が『道徳』第2章の内容に当た

る。企て全体における第1パートである)。続いて、この主張と類縁関係にある相対主義的な主張の一つのタイプが考察の対象とされ、これが論理的な欠陥を含むものとして批判される(この部分が『道徳』第3章の内容に当たる。企て全体における第2パートである)。そしてその後、この批判を携えて再び言明(b)に近似する主張の検討へと議論は戻る。直前で批判されたタイプの相対主義的な主張が引き起こすように思われたものと似た種類の不安を言明(b)に近似する主張もまた引き起こす可能性を含んでいないかが検討され、結果としてその可能性は否定される。さらに主観主義擁護論と反対論との相互批判を経て、擁護論の側から言明(c)が提示されることになる。最後に、この言明(c)に対するウィリアムズの見解が示されて、企ての全体像を描く作業は終わるのである(この部分が『道徳』第4章の内容に当たる。企て全体における第3パートである)。

### 3 「主観主義の信管を取り外す」企て・第1パートのプロセス

#### 3-1 第1パート前半部分の議論

第1パートでは、「言明(a)を立ち入ってどのように解釈するなら、それが真であるという見込みがあるような、しかも主観主義独自の主張を表すものとなるか」という問題意識に導かれる形で議論が進められる。

言明(a)は、①「ある人間の道徳的な判断は、単にその人間自身の態度を述べているに過ぎない」という言明だと解されるか、それとも②「ある人間の道徳的な判断は、単にその人間自身の態度を表出しているに過ぎない」という言明だと解されるかのどちらかであるとされる。このうち①をエアの言う「正統の主観主義理論」に、②をエア自身の立場である「情緒主義」に、それぞれ対応させることができるのはすでに確認した。

その上でまず、言明(a)が①と解される場合について検討がなされる。そして、「言明(a)は、もしそれが「道徳的な判断はその発話者の態度を述べている」と主張しているのならば、偽である」(15)と結論づけられるのである。

その理由を、ウィリアムズは次のように説明する。

もし(a)がそのようなことを主張しているとすれば、道徳的な判断(たとえば「嘘をつくことはどのような場合にも間違っている」)は判断内で主題として取

り上げられている事柄（例で言えば、嘘をつくこと）に対する判断者の心的態度がどのようであるかを語る「自伝的な報告」(15f.)に過ぎなくなる。すると、例で言えば、元の判断は「嘘をつくことに対して、私は例外なく否定的な気持ちを抱いている」などといった言明に置き換えられることになるだろう。ところがそうなると、個人間に道徳上の対立は存在しなくなってしまうように思われる。それというのも、たとえばある人（P）が下す「嘘をつくことはどのような場合にも間違っている」という判断と、別の人（Q）が下す「嘘をつくことが間違っていない場合がある」という判断は対立していると通常考えられるであろうけれど、これら二つの判断は、今解釈されているようなタイプの主観主義に則るなら、それぞれ「嘘をつくことに対して、私（P）は例外なく否定的な気持ちを抱いている」、「嘘をつくことに対して、私（Q）はときに否定的な気持ちを抱かない場合がある」、と書き換えられることになり、この二つの判断は共に（異なる）判断者の心的態度の記述として他方の判断とは論理的に独立に真でも偽でもありうるという点で決して対立するものでないからだ。しかし、道徳的な判断の間に対立が存在しうるということは、明白な事実ではないだろうか。「道徳的な判断は（少なくともその程度は）それらが意味していると私たちが見なしていることを意味しているものでなければならぬし、それらが意味していると私たちが見なしていること、それらを私たちが用いる仕方というのは、それらが決して単に自伝的な主張しかしていないわけではなく、反対の道徳的な判断を発話する者によって拒絶されている類の主張をしている、ということなのである」(16)。すると、道徳的な判断の間に対立が存在しないという帰結をもたらすような、今解釈されているようなタイプの主観主義は誤っており、道徳的な判断は単に判断者自身の態度を記述するだけのものではないのである……ウィリアムズが説明する理由づけは、以上である<sup>(5)</sup>。

「信管を取り外す企て」によるなら、言明(a)が①と解されるとすれば偽となる、とされる。だとすると、もし言明(a)が真である見込みのあるような主観主義独自の主張を表すものだとすれば、それが①と解されるとは考えられないことになる。これはすなわち、同様の条件の下では、言明(a)がエアの言う「正統の主観主義理論」を表すものとは考えられない、ということに等しい。

では、言明(a)が②「ある人間の道徳的な判断は、単にその人間自身の態度を表出しているに過ぎない」と解される場合はどうであろうか。これは結局、エ

ア自身の立場である「情動主義」と同類のものを言明(a)が表す場合に他ならない。

このことについて引き続きウィリアムズは説明を進める。その内容は次のとおりである。

仮に言明(a)がさしあたり②「ある人間の道徳的な判断は、その人間自身の態度を表出している」と解されるなら(この場合、道徳的な判断が判断者の心的態度の表出以外のはたらきを有する可能性が排除されていないことに注意されたい)、その限りで言明(a)は議論の余地なく正しく、また無害である。それというも、この場合道徳的な判断は、それが誠実に下されたものであれば、そこにおいて判断者が何らかの道徳的な問題に対する自らの態度を表出したものと見なされることになるが、それはちょうど、事実に関する判断について、それが誠実に下されたものであれば、そこにおいて判断者が事実に関する何らかの問題に対する自らの態度を表出していると見なすことができるのと全く同様であるからだ。しかし、だからといって、事実に関する判断に対して私たちは主観主義的な見解—エアの議論から先に読み取った表現を用いるなら、「ある判断は、その対象である物事のありようとの関わりでなく、判断者の心的な態度との関わりで成り立つものである」という見解—を採りはしない。私たちは、事実に関する判断がその対象である物事のありようとの関わりを有し、それにより、判断において表出されている態度である信念が真であったり偽であったりしうる、ということを知っているのである。したがって、②'のように解される限りでの言明(a)は、(議論の余地なく正しく、また無害でもあるものの)主観主義的な見解として独自の内容を含むものではないと言わざるを得ない。言明(a)が主観主義独自の主張を表すものであるためには、むしろそれは②のように、道徳的な判断のはたらきを限定的にとらえるものとして解される必要がある。すなわち、「道徳的な判断をなす者は自らの態度を表出しており、しかもそれが道徳的な判断について言われるべきことの全てである」(16f, 斜字は原文強調、以下同様)と解される必要があるのだ……このようにウィリアムズは説明する。

言明(a)が②(すなわち、エア自身の主張である「情動主義」と同類のもの)と解されることは、(a)が真である見込みのあるような主観主義独自の主張を表すものであるために必要である、とウィリアムズは語っている(もちろんそれは、言明(a)が①もしくは②と解されるべきものであること、そして(a)を①と解

するのが困難であることを前提した上での話であるが)。②で主張されているように「ある人間の道徳的な判断は、単にその人間自身の態度を表出しているに過ぎない」のであれば、道徳的な判断はその判断の対象である事柄に向けて判断者が抱く心的態度の表現（たとえば、拍手喝采やブーイングなど）と同質のものとなる。この点に主観主義独自の特徴を読み取るということは、結局のところ、道徳的な判断が表出している（とされる）心的態度と事実に関する判断が表出している心的態度（すなわち信念）とがある重要な部分で根本的に異なることに見出すことに等しい。そしてその相違は、後者の態度が正しかったり誤っていたりしうる（つまり、真もしくは偽でありうる）のに対し、前者の態度がそうではない、という点に求められる。「言明(a)が有しうる主観主義的な力は、道徳的な判断の中で表出される態度が正しかったり誤っていたりするなどとありえないという見込みの内に存する」（17、傍点は本稿筆者による、以下同様）、というウィリアムズの言葉は、このことを明確に述べたものである。

### 3-2 第1パート後半部分の議論

それでは、言明(a)を②「ある人間の道徳的な判断は、単にその人間自身の態度を表出しているに過ぎない」と解するならば、(a)が真である見込みもあると言えるだろうか。もしこの段階でそう言えるなら、第1パートでの議論はここでつつがなく終わりを迎えることになるだろう。しかし実際にはウィリアムズは、言明(a)を②と解した場合、(a)が偽であるとされる可能性があることを説明する。その際に論点となるのは、「道徳的な判断の中で表出される態度が正しかったり誤っていたりすることがありうるのではないか」という問いである。

この論点をめぐる「企て」の議論をたどってみよう。議論は、この問いに対して肯定的に答える立場Aと否定的に答える立場Bとが、この順に二度のやりとりを交わす形で進行する（ $A_1 \rightarrow B_1 \rightarrow A_2 \rightarrow B_2$ ）。

【肯定側の主張A<sub>1</sub>（②と解される限りでの言明(a)が偽であることの根拠の提示）】まず、価値判断という点では同じであっても、単なる趣味や好みに関して下される判断の場合とは違い、道徳的な判断については、それが誤っているという考えを私たちは現に重く受け止めるであろう。たとえば、「キュウリは美味しくない」というある人の判断が誤っているかどうかという問いを私たちはたいてい真剣に受け取りはしない（「そんなことは当人の好みの問題で、正

しいわけでも誤っているわけでもないよ」という具合に)。それに対し、「嘘をつくことは悪くない」という判断が誤っているかどうかを、私たちは(少なくとも比較的)真剣に考えようとするだろう(「*藜食う虫も好きずき de gustibus non disputandum*」が道徳に当てはまらない格率であるということが、まさに道徳の一つの印なのである)(17)。このことはとりもなおさず、道徳的な判断が表出している(とされる)態度がどちらかという信念に類似しており、正しかったり誤っていたりしうる、ということの証拠ではないだろうか。

【否定側の主張  $B_1$  ( $A_1$ への反論)】いや、そうではない。道徳的な判断が正しいかそれとも誤っているかという問題が重く受け止められるからといって、道徳的な態度が信念に類似したものであるとは言い切れない。問題が重く受け止められるという現実が示しているのはむしろ、社会の内部において人々の道徳的な態度が類似しているという状態を確保することが重要であるということだ。「正しい」や「間違っている」といった言葉を用いることは、合意を確保したり意見の異なる者たちを際立たせたりなどのことをおこなうための装置 apparatus の一部(17)であり、道徳的な態度そのものが何らかの意味で正しかったり誤っていたりしうるわけではないのである。

【肯定側の主張  $A_2$  ( $B_1$ への反論・②と解される限りでの言明(a)が偽であることの別の根拠の提示)】 $B_1$ のとおりだとすると、説明がつかなくなることがある。それは、「道徳上の事柄について、それも個別のケースにおいてのみならず一般的な問題に関しても、決して恣意的でない仕方でも、理由に基づいて自分の考えを変えることがありうる(18)」という事実である。たとえば、人工妊娠中絶を容認することは間違っていると考えていた人が、「自分が身を置いているグループに逆の考えを持つ人たちが多く、孤立感を深めたために」といった感情に訴えるような動機からだけでなく、十分な思慮の末に(あるいは、場合によっては他者との議論の末に)自らの意見を変えるということは起こりうる。もちろん、道徳的な態度が常に理由によって決定されたり変更されたりするわけではないだろうけれど、「道徳的な態度および判断に関する私たちのモデルは、少なくともそうした理由づけのための余地を残すほど十分に複雑なものであるはずだ(18)。理由に基づいて支えられたり形を変えたりするという特徴は、道徳的な態度がある意味において正しかったり誤っていたりしう

ることを示すものであろう。

【否定側の主張 $B_2$  ( $A_2$ への反論)】理由に基づいて支えられたり形を変えたりするからといって、道徳的な態度がそれ自体として正しかったり誤っていたりしうるものとは言えない。なぜなら、個別の道徳的な問題やより一般的な原理に関する問いについて私たちが理由に基づく思慮をめぐらすことができるのは、思慮する者(たち)によってすでに受け入れられていて思慮がそれに照らしてめぐらされるような道徳的な態度がその背景に存在するからである、と考えることができるからだ。たとえば、「現在ただ今日の前にいるこの人に、自分の都合で嘘をつくのは間違っている」と私が判断を下すのは、たしかに「嘘をつくのはどんな場合でも間違っている」と私が考えているからかもしれない。その場合、前者の判断は理由に基づいて下されたのであり、その意味で正しかったり誤っていたりしうる。しかし、その際前者の判断の理由(根拠)となる後者の判断は、いったい別のどのような理由に基づいて下されたのであろうか。もしかすると、後者の判断を私は何らの根拠もなしにすでに受け入れてしまっているだけなのかもしれない。また、仮に別の何らかの根拠に基づいて後者の判断を下しているのだとしても、ではその根拠は他のどのような理由に基づいて下されたのであろうか……結局、より根本的な理由をたどるこの連鎖がどこかで「理由なしに受け入れられている態度」に行き着くという可能性を否定することはできない。いやむしろ、その可能性こそが現実であると考えるのがふさわしいのではなからうか。ある道徳的な態度がその理由となる別の態度との関係において正しかったり誤っていたりしうることは認められるとしても、それはあくまでもより上位の態度が構成する枠組みの内部においてのみ可能なのであり、「私たちが受け入れられた一般的な態度から成るその枠組みの外に出るなら、さらなる議論は存在しない、すなわち何であれ何らかの立場が正しいあるいは誤っているということを示す手立ては存在しない」(18)のである。

……以上が、「道徳的な判断の内では表出される態度が正しかったり誤っていたりすることがありうるのではないか」という問いをめぐる「企て」の議論である。この議論において、問いに対しては最終的に否定的な答えが与えられることになる。これはつまり、言明(a)を②「ある人間の道徳的な判断は、単にそ

の人間自身の態度を表出しているに過ぎない」と解した場合、(a)が(少なくとも)真である見込みがあるということの意味する。そしてこの結果、②と解することによってのみ、(a)は真である見込みがあるとともに主観主義独自の主張を表すような言明と見なせる、という第1パートの結論が得られたわけである。

ウィリアムズが説明する「主観主義の信管を取り外す企て」によるなら、エア自らの立場である「情緒主義」の特徴を述べる②の言明こそが、真である見込みのある主観主義独自の主張を表している。そして「企て」第1パートの議論を通じて、②と解される限りでの言明(a)は「受け入れられた一般的な態度から成り、より個別的な態度の正当化に役立つような枠組み」の存在を含意するものとして位置づけられるに至った。「主観主義の信管を取り外す企て」は、この点において主観主義の認識論的な言明(b)および道徳に関する相対主義との接点を持つに至る。

## 註

- (1) 「それらがそのように翻訳されることが可能である [田中註：倫理的な価値についての言明が経験的な事実についての言明に翻訳可能である] ということが、ふつう主観主義者とと呼ばれる倫理学者と、功利主義者とと呼ばれる倫理学者の意見である。それというのも、功利主義者たちは行為の正しさおよび目的のよさをそうした行為や目的が引き起こす快樂あるいは幸福あるいは満足という点から定義し、主観主義者たちはある人もしくは一群の人々がそうした行為や目的に対して抱く是認の感情という点から定義するからである」 (Ayer 104)
- (2) 「一見すると事実についての言明であるように見えるものがほんとうにそうであるかどうかを調べるために私たちが用いる基準は、検証可能性という基準である。ある文が任意の人物にとって事実として有意味であるのは、その文が表明すると称する命題を検証する方法をその人物が知っているときであり、またその時に限る——すなわち、どのような観察がなされる場合に、一定の条件下でその命題が真であると受け入れられるに至るか、あるいはその命題が偽であるとして拒否されるかをその人物が知っているときであり、またその時に限る——と私たちは主張するのである。他方、もし命題であると見なされているものが、それを真であるもしくは偽であると仮定してもその人物の未来の経験の本性に関するどのような仮定とも両立可能である、といった特徴を有しているならば、その人物に関する限り、命題であると見なされているそのものは、トートロジーでないとするなら、単に偽の命題に過ぎないのである。偽の命題を表明するような文は、ひょっとするとその人物にとって情緒的には有意味であるかもしれないけれど、それが文字通り何を表すかに関して言うなら、有意味でないのだ」 (Ayer 35)

- (3)「私たちは今や、倫理的な判断の妥当性を決定するための基準を見出すのが不可能であることの理由をみてとることができる。それは、倫理的な判断が通常感覚—経験から神秘的な仕方ですべて独立しているような「絶対的な」妥当性を有しているからではなく、そもそも何ら客観的な妥当性を有していないからなのである。もしある文が何の言明もなしていないなら、その文が言っていることが真であるか偽であるかを問うことに何の意味もないのは明らかだ。そして私たちは先に、単に道徳的な判断を表出しているだけであるような文が何も言っていないということを見た。道徳的な判断は純粹に感情を表出するものであり、そのようなものとして、真偽のカテゴリーの下に入りはしないのである。道徳的な判断が検証不可能であるのは、苦痛の叫びや命令の言葉が検証不可能であるのと全く同じ理由による——つまり、それが真正の命題を表明していないからである」(Ayer 108f.)
- (4)「何らかの形の科学法則の下に原理的にもたらし得ないような経験の領域など存在しないし、それを与えることが原理的に科学の能力を超え出ているようなタイプの思弁的な知識など存在しない」(Ayer 48)
- (5)周知のように、この理由づけは決してウィリアムズのオリジナルではない。たとえばエアは、「正統の主観主義理論」を批判する著名な議論として、この理由づけと全く同じタイプのものがムーアによって提示されたと述べている (Ayer 110)。

ウィリアムズ『道徳』の英語テキストは、

Bernard Williams, *Morality: An Introduction to Ethics*, Harper & Row, 1972, reissued by the Cambridge University Press, 1976, Canto edition, 1993.

を用いた。本稿本文における『道徳』からの引用箇所には、上記テキストのページ数のみを丸括弧に入れて書き添えた。

## 参考文献

- Ayer, Alfred Jules (1952) *Language, Truth and Logic*, Dover Publications, an unabridged and unaltered republication of the second (1946) edition. (邦訳・A.J.エイヤー『言語・真理・論理』吉田夏彦訳、岩波現代叢書、1955年。ただし、本論文中での引用箇所については、田中が訳を作成した)
- Warnock, Mary (1960) *Ethics since 1900*, Oxford University Press. (邦訳・M.ウォーノック『二十世紀の倫理学』保田清監訳、法律文化社、1979年)